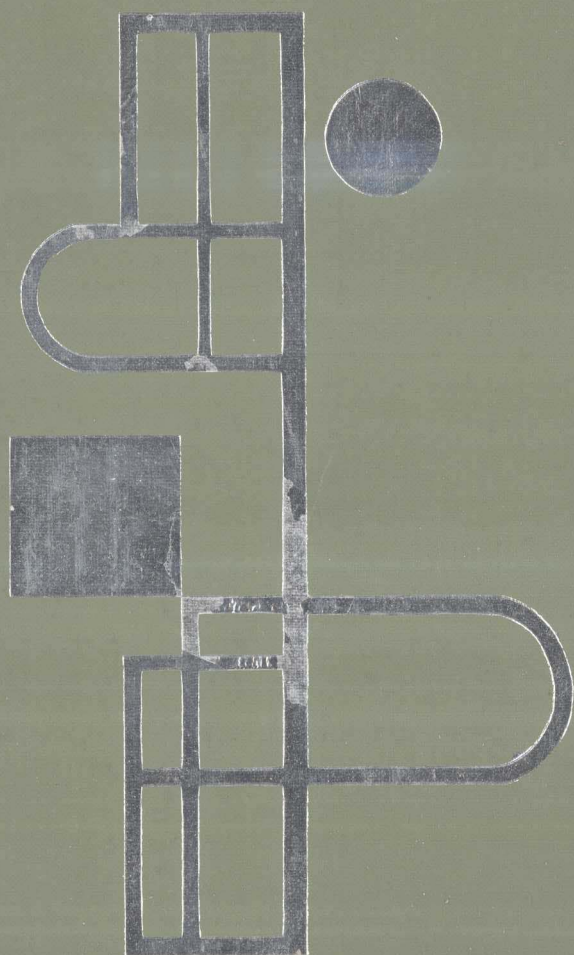
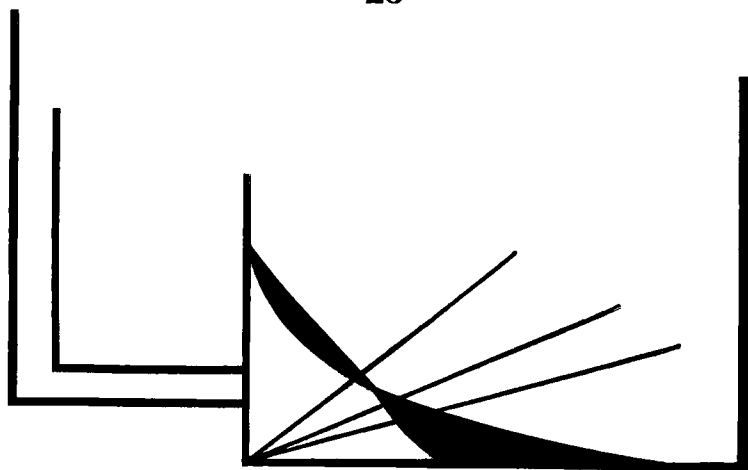




椎名麟三 集

新選 現代日本文學全集

25



筑 摩 書 房 版



集三麟名椎

昭和三十四年六月二十五日 発行

著者 椎名麟三 しゅうな りんぞう

発行者 古田 晁 東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 山田 一雄 東京都青梅市根ヶ布三八五

発行所 筑摩書房 東京都千代田区神田小川町二ノ八

〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

整版 株式会社 精興社
印刷 株式会社 精興社
製本 牧製本株式会社

椎名麟三集 目次

永遠なる序章	五
赤い孤独者	七
愛の証言	一九
美しい女	二四
運河	三四
ある不幸な報告書	三八
寒暖計	三六
猫背の散歩(抄)	三五
安太の人間の文学	務台理作 四六
解説	埴谷雄高 四三

装
幀

恩地孝四郎
恩地邦郎

椎名麟三集

永遠なる序章

第一章

日はもうたそがれている。風が強い。砂川安太は、後を振り返つて、今そこから出て来たばかりの病院を見ながら、思わず忌々しい声で呟いた。――まるで大きな墓みたいだ。

その古びたコンクリートの建物は、樹木にかこまれて、全く墓のようにひっそりしている。夕闇にうかんでいる玄関の車寄せまでが墓場のように白々しい。安太は、溜息をつく、そこに見えるお茶の水の駅の方へのろろ歩き出した。その彼の姿は、彼自身まで、墓場の番人であるかのように見栄えのしない恰好である。機械油のしみのある復員服、そして左足が少しおかしい。義足なのだ。それは歩くたびに、微かないやな音を立てる。肺の駄目なことは知っていた、と彼は心に呟く。しかし心臓までが駄目になつていようとは知らなかつた。今となつては、一切がもう無駄なのだ。歩くということさえ無駄なのだ。

安太は、やつと橋まで来ると、もう立つてい

ることも出来ないように、欄干に凭れかかつていた。眼の前が暗く、このまま死んでしまいうな気がする。駅から吐き出された多くの人々が、夜にせき立てられてあわだく彼の後を通る。しかし彼には、もう何を考える力もない。安太は、溜息をつくと、もう一度橋の下を眺めた。山の上から谷底でも見るようにその水は遠い。ふいに自分の傍で、何かの火の粉が、強い風に小さくとび散つた。気が付くと、煙草の火なのだ。そして更に気が付くと、すぐ傍に人間がいるのである。若い勤人風の男で、人待顔に駅の方を眺めている。瞬間、安太はひどく感動している。死を宣告されたような今、すぐ傍に人間のいることに気付くことの出来る自分が強く心をつたつたのだ。彼は救われたようにその若い男へ話しかけたい衝動を感じた。そして彼は上衣のポケットをさぐつてゐる。何カ月も前の、煙草を吸つていたころの吸いさが、くたくたになつて出て来た。

「すみません、火を。」と安太は云つた。

だが、やつと煙草の火を吸いつけると、彼は忽ちむせてゐる。火を呉れた男は、うろんそうに安太を眺めると、駅の方へ去つて行つた。安太は打ちひしがれたように、煙草を川の方へ捨てた。だが、これは赤い火の点となつたままなか落ちて行かないで空中に長くともまつてゐる。一体どうしたのであらうと彼は不安になつて息をつめてゐる。しかしそれはふと消える。やはり落ちていたのだ。ただ橋の上からはその

川面が余りに深すぎるのだ。

安太は、はつと吐息をついた。するとその彼に、昔身投げをしたときのことか思ひうかんでゐる。そう、それは十六のときだつた、と彼は考える。するとそのときの感覚が、ありありと彼の肉体によみがえつてゐる。それは思ひがけない新鮮な感覚である。少年の彼は、息がつまつてもがいた。それでいながら、彼は、水の中が夜だというのに昼のように異様に明るいを見ていた。しかもその明るさは、やわらかなあたかい諦めに似た平和を、自分の身体中に沁み渡らせていた。全くそれは思つてもみない新鮮な感覚だつた。しかし次の瞬間には氣を失つていたのだが。

しかし自分は、どうしてあのとき自殺出来たのだらう。その安太に、幼時からの生活が思ひうかんでゐる。物心ついたとき、彼は、四畳半と三畳の汚らしい長屋に住んでいた。最初の五つか六つのころの記憶は、どうしてか波のようににそり返つてゐる真黒に汚れ切つたチャブ台なのである。その脚は、一本とれていて、有り合せの板切れでそれを補つてあるのだが、ひどく不安定だつた。彼は、そのために食事のたびに粗相した。そのたびに兄や姉が騒ぎ、母がわめき、父の堅い拳固が彼の頭にとんだ。全く粗相するのは、多い家族のなかで、きまつて自分だけなのが彼には判らなかつた。しかも彼は、食卓に向うと、苦痛なほど緊張していたにかかわらずやはりとんでもないことが起るのである。

彼には、一寸した自分の動きにさえ自分を不幸におとし入れるそのチャブ台が、意地の悪い鬼婆のような気がしてならなかつたのである。

それからあの死の畳だ。表はぼろぼろになつて台だけになつてゐる四畳半の隅の畳である。病氣になつた者は、その場所を専有する特権が許されて、そこへ病床が延べられる。すると不思議なように死んでしまふのである。彼の兄弟も父もそこで死んだ。少年の彼は、最初の姉が死んだとき、その畳が死の畳であることをさつたのである。そして彼は、父や兄などがそこで死んで行くのを見た。しかし彼は、それを口にするとは出来なかつた。狭い家では、そのほかに病床をとるとどんな可能な場所があつただろう。しかもそれを口にするということは、かえつて家族の者たちに不快を与えるに過ぎないだけではないか。だがそのためにそれを黙つていなければならぬということは、やはりひどい苦痛だつた。だから彼にとつては、その畳は、いつの間にか恐怖の的となつていた。ふと、その畳の上に寝転んでゐる自分に気がついたりすると、思わずあわててとび上つた。そして数日は、その畳から気味の悪い死が沁み移つた気がして、自分で自分の身体に脅えつづけていなければならなかつたのである。

死はそのころから彼の前に立ちつづけていた。そして遂に最後には、自分と母だけになつてしまつたのだが、母は、自分の母でありながら、愛することの出来ない醜い老婆になつていた。

そして内職のかもじのきたならしい毛を梳きながら、始終泣きそうな疲れた声で、もう生きるのは嫌だ、嫌だと呟いていた。

そのころ小学校を卒業した安太のつとめた小さな燐寸工場が思ひつかぶ。震動するために燐寸の棒を立てる枠から外れてとび出した金具を、バケツへ拾い集めて歩くのが彼の仕事だつた。その鉄の金具は、小さなバケツに半ばもたまる、力弱い彼には、どうしても持ち運ぶことが出来ないのだ。しかし後から後から金具はとぶ。少しずつ運んでゐては間に合わないばかりか、親父がとなり散らすのだ。だからどうしても出来るだけ多く運ばなければならなかつた。そのバケツの重さから、生活の重さを、生きることの重さを、少年の彼は、身にしみて十分すぎるほど知つたのである。その彼は、いつも腰をかめて歩いていなければならぬために、少年でありながら老人のように腰が曲つていた。そしてある日、母はあの畳の上に床を延べて寝て居り、翌朝死んでゐた。彼の十六のときである。その夜、彼は、言問橋の近くの河岸から身を投げた。生活と、死の恐怖から逃れるために。

安太は、我に返つて呟いた。何を今、くだらないことを思ひ出しているのだらう。しかも自分にとつて重要なときに、何故こんなくだらないことしか思ひ出せることが出来ないのだらう。省線が、轟音を立てて同じ橋の下を通つてゐる。彼はもう暗くて見えない川面から眼をあ

げ、ぼんやり駅の方を眺めた。人々が構内に渦を巻くようにあふれている。思はず彼は心に叫んでいる。全くどうすればいいのだらう。あの医者の言葉から考えれば、もう自分は永くはないのだ。つまり日頃から自分が心から願つてゐたように、この世からおさらば出来るわけなのだ。全く願つたりかなつたりというわけなのだ。それなのに歩く氣力さえなくなつてゐるなんて滑稽ではないか。自分がこの世からすつかり消えてなくなつてしまふということが、今となつてはそれほど恐ろしいことなのか。

氣がつくと、安太は渦巻く人々を羨しそうに眺めてゐるのである。そしてその自分に氣づいた刹那、彼は、云いようのない強い戦慄にたづねかれていた。しかしその彼は、思いがけなく神秘な不可解な感情に圧倒されてゐる。その戦慄は、恐怖のそれでありながら、性的なエクスタシーに似た不思議な歓喜にあふれてゐるのだ。彼はぼんやり考える。一体自分は何に襲われてゐるのだらう。そしてこの胸に強く満ちてゐる歓喜は、一体何なのであらう。彼は耐えがたそうに深い吐息をした。瞬間、彼は再び戦慄してゐる。しかしその胸の歓喜は戦慄のたぎに一層力をまして彼を揺り動かし、それはまた胸のなかの烈しい光のように実感される。全く自分は、どうしたのであらう。死ぬより仕方のない今、これではまるで自分は希望にみちあふれてゐる人間のようなではないか、全く自分はどうかしてしまつてゐるのだ。

安太は、何ものかに押しやられてゐる自分を感じながら病人とは思えない勢いで、駅の方へ歩き出さずには居られなかつた。その彼には、常にないなつかしさで、竹内銀次郎の白い顔が思ひつかんでゐる。そして何故、日頃疎遠な銀次郎の顔が、今自分の胸にうかぶのか、安太には判らないのだ。しかも今の彼に一番痛切に必要なもの、つまり彼の病氣を一挙に快癒させる薬品というような感じで銀次郎に会いたくなつてゐるのである。彼は、歩きながらも途方に暮れたように呟いた。なるほど、銀次郎は医者だし、しかし医者におうが何をしようがもう無駄なのである。それなのに自分は、どうしても行くのであろうか。それより下宿へ帰つて寝てゐる方が賢明ではないのであろうか。

だが安太は、東中野にやつて来てしまつてゐた。彼は坂道を上つて行つた。日はすつかり暮れて、薄暗い星明りのなかに、取り片づけられもしないで空襲のとき以来捨て置かれてゐる焼跡が、自然に崩壊した廢墟のようなある野趣のある姿となつてひろがつてゐる。彼は、漸くそのなかにただ一軒ぼつと立つてゐるバラックへ辿りついた。板壁のどこかがゆるんでゐるのであろう、低い腰の羽目板の隙間から、一条の光が洩れてゐる。彼は、その銀次郎のバラックの入口にしばらくたずんでゐた。何のためにもここへ来ずに居られなかつたのか、今となつてもやはり彼に判らないのである。

やがて安太は、仕方なさそうに入口の板戸の外から二三度声をかけた。しかしなかにはひつくりしてゐて、何の応答もない。彼は、かえつて安心したような氣持になつて、ぼんやり四辺を見廻した。遠く新宿の灯が見える。だが、ふと氣が付くと、彼は、危険なほど低く垂れてゐる黒々とした電燈の屋外線を見ていた。ただ電燈の屋外線が垂れさがつてゐるだけである。しかし彼には、それが何故か不吉な感じがしてならないのである。そうだ。世の中の一切がゆるんでゐる。今に何事か起るだろう。しかしその何事かは、もう既に自分にやつて来てゐるのだ。ないだろうか。そうだ。先刻病院を出てから

安太は、我に返つて、もう一度声をかけたが何の応答もない。寝てしまつたのかも知れないと彼は考へる。それならそれでよかつたのだ。彼は帰らうとして、遠くを眺めた。そのとき何ものか得難い知れない力が自分をつかんでゐるのを感じる。その彼はもう強く入口の戸をたたいてゐる。何故病院を出たとき、どうしてもここへ来なければならぬ氣がしたか、彼には判らない。しかし自分はどうしてもここへ来なければならぬ氣のした自分を信ずるより仕方がないのだ。彼は再び強く戸をたたいてゐる。しかしやはり何の応答もない。彼は遂に入口の戸に手をかけた。すると立てつけの悪いその板戸は、思いがけなく簡単に外れるような勢いでひらいた。そして安太は、銀次郎の起きてゐるの

を見た。銀次郎は一間きりしかない六畳の片隅の柱に凭れ、紺色のズボンに茶褐色のジャケツを着た姿で、何かの木ぎれを彫つてゐる。銀次郎は突然夢をさました人のような、見知らぬ人を見るような眼を安太に向けながら、重苦しそうにいうのである。

「お前か。」

安太は仕方なさそうに微笑しながら上り口に腰を下ろした。そしてしばらく銀次郎の透きとおるように白いととのつた顔を見ていた。それは全く病的な感じがするほど白い。そして安太は銀次郎が軍医少尉のとき、色を白くするために亜硫酸を飲んでゐたという噂のあつたことを思ひつかべてゐる。しかしそれは単なる噂にしか過ぎなかつたのであろう。銀次郎は再び安太には無関心に、木屑を膝のあたりへ散らしながら、小刀で木を彫りつづけはじめてゐる。その態度には周囲への徹底的な無関心さを感じられる。だが安太は再び人のいい微笑をうかべながら、その銀次郎へ声をかける。

「何を彫つてゐるんです。」

すると銀次郎はふと我慢ならないように、彫つてゐた手を膝の上へ落した。そしてしばらくぼんやり、自分は何を彫つてゐるんだろうというように、細長い木片を見てゐる。それから自分を嘲るような癡癡の笑い声を立てながら、ひとり言のようになう。

「煙草のパイプだよ。」

「煙草のパイプ？　だつてあなたは煙草を吸わ

ないでしよう。」

「だから、お前に呉れてやるさ。」

そして銀次郎は、勢いよく安太の傍に投げて寄こした。手にとつて見ると、なるほどパイプである。それは何か髓のある細い木でつくつてあり、その木には出たらめだとしか思えない模様様が刻んである。銀次郎は退屈そうな吐息をすると、低い声でいう。

「死にてえな。」

安太はその彼へ笑いかけながら、所在なく家の中を見廻していた。そうだ、この家へ来るのは、これでまだ三度目なのだ。それなのに、どうしてこんなに飽々とした気分になるのだろうか。

そして彼は、家のなかで火を燃すせいか、ひどく煤けてつららのように下つている蜘蛛の巣を見ている。それからただ一つの押入れには戸がまだ入らずに古びた灰色のカーテンが吊り下げられていて、その裾はぼろになつて垂れ下つているのを見ている。それからまたそのカーテンの下から、ざるに入れたしおれた白菜やいろんな空罐がのぞいているのを見ている。だがただ、それだけで、そのほかに全く何も見えない部屋のなかには寒々としている。しかし、そのほかに何も見えないということが判ると、安太は再び飽々とした気分になつていた。彼は再び銀次郎を見た。銀次郎は眉に皺を寄せながら、ぼんやりしている。そこには何か滑稽なものが感じられるのである。安太は、思わず銀次郎へにこにこしながらいう。

「今日、会社から病院へ廻つて、ここへ来たんです。……何の用事もなかつたんですが。」

「会社？ ……………しかし俺の知つたことじやないさ。」

「そうですね、そりや、全くそうですね………。」

「そして安太はふと思ひ出している。「いいものをお見せしめようか。」

安太は持つていた大きなハトロンの封筒を、大事そうに銀次郎の方へ手を伸ばしながら差出した。安太のその眼は異様な期待に輝いている。それはまるで卒業証書を親に渡す無邪気な子供の眼に似ている。銀次郎は仕方なさそうにその封筒から青いレントゲン写真を引出した。それは安太の肺のうつつているフィルムである。銀次郎はほの暗い電燈へしばらく大儀そうに透かしている。気が付くとフィルムの青い色が銀次郎の顔に落ち、忽ちその白い顔はいやらしい死人の顔に変わつていくのだ。やつと銀次郎は、フィルムを封筒へ入れて安太へ投げ返すと、物憂そうにいう。

「お前は知つていふのだから。」

「ええ。大体は病院の医者の言葉で想像がついているんですが。半年持てばいい方ですか。」

すると銀次郎は、ふいに思ひがけない激しさで断定する。

「半年？ 三月ぐらいだろう。そしたら死ぬんだ。それが正確な客観的結論だ。この結論は誰だつて超えることは出来ないよ。」

瞬間安太の身体をあの恐怖とも歓喜ともつかない戦慄が、火のように通り抜ける。その彼は感動したように微笑している。しかし銀次郎は、その安太へ、無関心な冷淡さで呟いた。

「しかし俺の知つたことじやないさ。」

そう。全く銀次郎の知つたことじやない、と安太は考える。しかし安太はその銀次郎へやさしい微笑を投げかけながら慰めるようにいつて

いる。

「よかつた。ほんとによかつたと思うんです。あなたの口からそれを聞けたということは。」

「俺の口から？ 誰の口から聞いても同じことさ。」

「勿論、それはそうなんです、しかし、——まあただそれだけのことなんです。それじや、来られたらまた来るつもりです。全くまた来られたらですが。」

さて、自分はどうするつもりなんだろうと安太は、銀次郎の家の灯の見えない道傍の焼け崩れた石塀のかげを見つけると、救われたように立ちどまつて呟いた。三月、すると来年の二月だ。つまり後もう三度給料をもらえば、それで自分はこの世に居ないのだ。すると、再び彼の身体をなかに強い戦慄が通りすぎている。彼は、呆然と石の上へ腰を下ろしながら、やはり歓喜にあふれている自分が不可解なのである。全くどうして、酔うような強い歓喜が自分を打ちひらくのであろう。こんなことは今迄にないことだ。そして一瞬、安太は、この歓喜のなかに何かの啓示のようなものを感じている。その彼は、

自分がまるでふいに殻をむしりとられた蛹まぶたのような感じがしている。何か自由で、何かその自由が肌寒い。

全く判らない、と安太は繰り返す。こんな晴れがましい気分なんて自由には不似合だ。むしろ、自分のすべきことは、自分の死をわめき、呪い、自分の死の不当を人々へ訴えることではないであらうか。それともただだまつて今晚自殺するかだ。しかし今、自分の前に誰かが通るかかったら、その人へ救いを求めるであらうか。いや、自分は逆に嬉しうに、自分は三月後に死ぬのだということを告げるに違いない。

安太はあたりを見廻した。だが、あたりはひっそりして、先刻から人の気配もない。安太は、再び自分の思いにおち入っている。しかし自分は、一切が不可能になつた今、本当に生きて行けるであらうか。生きて行けるとしても、如何にして生きて行くのか。恐らく神を信じている人は、神によつてそれは可能であらう。しかし自分には神はない。自分の死を超える可能を信じ得ない者にとつて、もう自分は全くの無意味なのではないか。あの医者が云つたように、せいぜいうまくいものを喰つて静かに寝ているべきなのではないか。勿論、医者はその言葉で患者の死を暗示して呉れたのであつても、それが医学の最善の勧告なのであろうか。しかし全く一切が不可能となつた今、自分はどうして生きて行けばいいのであろう。何が自分に可能なのであろう。首をくくるより外には、何の可能も

残されてはいないのではなからうか。

安太は、ふと白川という方面委員の広い庭を、そしてそこでの生活を思ひうかべている。それは身投げした彼が、通行人に救われ、警察からその方面委員の手にひきとられて五日間下男小屋でその家の下男と一緒に暮したのである。その家の生活は、安太には不思議なもののように思えた。本所の真中にこんな立派な家があるということが更に不思議だつた。築山があり、泉水があつた。そしてその手入れのよく行き届いた芝生では、きれいな洋服を着た十二三と十歳位の二人の少女が、犬と戯れていた。洋室の窓には、やわらかそうなレースのカーテンが風に揺れ、夜は何かの宴会があるらしく、レコードの音楽にまじつて人々の賑やかな笑い声が聞えていた。そこには死の影すらなく、生活は軽やかに楽しく流れていた。生活、こんな生活が人間に可能であるとは、現在眼で見ながら信じられなかつたほどである。

だが、終りに近いある日、安太は下男の手図を受けて植木に水をやつた。そしてそれを了えてほつと一息しているとき、傍の窓から聴いた、高い調子でゆるやかな旋律をもつたピアノが彼の耳を打つたのだ。それは彼をひどく動かした。それは学校にもなかつたピアノなのである。そしてそのピアノの音が、こんな彼の身近に起つたことが、彼を驚かせたばかりでなく、あの上の方の少女がひとり弾いていることに驚いたのだ。そしてまた、そのピアノの音がその生活

の象徴のように流れて来て彼を打つたのだ。だが、すぐ翌日、彼は、その当時今つとめている郊外電車の大株主であつたその方面委員の手から、内田という運転課長の手に渡された。そして次の日から、その郊外電車の小さな駅の駅手見習として毎日その家から通つた。しかしその家の生活は、子供もなく、大きな家に住みながら、ときに菜を買う金もないときがあつた。地代はとどこおり、自分のものであるその家も担保に入つていた。そして深夜、五十近いその男は、酔いどれで帰つて来たと思うと、いきなりその妻をなぐりつけるのだつた。勿論、家に帰らない日が多かつた。妾を三人かこつて居り、そこを廻り歩いて泊るのだ。しかし会社では部下にも上司にも評判のいい男で、給仕にも冗談を云つて笑わせるのだつた。しかし安太は彼のかげの生活を知つていた。商人が来て密談していることも多く、その家も会社の資材で建てたという噂さへあつた。しかし安太に対しては、夜中、たたき起して、酒くさい息を吐きながら、理由もなく大きな声で罵倒するのだつた。「おい、死に損い。一体誰のおかげで生きていると思う。俺を誰だか知つているか。俺が居なかつたらT電は動かないんだぞ。」それが明け方まで繰り返してつづけられるのである。その彼に云われる言葉は、そつくりそのまま、妻にも繰り返されるのだつた。そのようなとき、彼は、彼が引取られるまで物置同様になつていた女中部屋の薄い蒲団の中で、深夜から夜明けまで、罵

声や物のこわれる音や、妻の悲鳴をじつとこごえた心で聞いていた。その妻は、いつも泣きはらした眼で、台所の隅でいつもぼんやりしていた。ずつと後に二階への階段から突落されたのが原因で、死んで行つたのだが。そうだ。その葬儀には、妻の親戚は一人も見えなかつた。彼女には親も親戚もなかつたのだ。彼女は、その課長の大学生当時の下宿先の女中であつたことを、そのとき知つた。それでありながら彼女は、安太へ口を利いたこともなく、食事の世話もして呉れたことはなかつた。ただいつも暗い顔をして、黙り込んでいた。彼女の死後、妻の一人がその後に直つた。それは、その会社の事務員をしていた女であつたが、そのときもう安太は出征していたのである。

死に損い。それは夜更け安太に対して怒鳴り散らされる罵声から付近に知れ渡つていた。それとともに、自分の給料は、会計から直接運転課長に支払われ、死に損いは自由になる一銭の金も持つていないことも知れ渡つていた。しかしその家の塀にほとんど喰つつくように立つてゐる裏の長屋の人々は、安太を何かと慰めて呉れた。そのなかに山本というアナキストが住んでゐた。画家の彼はときにやつて来る警官の前でも平気で春画を描きつづけているという男だつた。彼は春画を描いて生活を立ててゐたのだ。世の中は、次第にファッショに傾き、山本のような思想をもつ者への弾圧は苛酷を極めていたが、その山本という男だけは、何か特権で

も持つてゐるようによ自由であつた。彼の左翼関係の蔵書も何の制限も受けてはいなかつた。その彼が、ある日、十六の安太に一冊の本を貸して呉れたのである。それ以来次々と彼は安太に本を読ませた。しかしその本は、十六の安太には何とむずかしい本であつただろう。その本でやつと覺えたものは、フリーエヤバクーニンやクロボトキンなどの名前にしか過ぎなかつた。だが、そのなかで安太を今に至る迄支配しつづけている自由と云う言葉を覺えた。それはあのピアノの音と不思議に諧和するただ一つの言葉だつたからだ。最初の自由への衝動は、運転課長への反抗であつた。それは彼自身の意味では、現在の社会組織への反抗を意味してゐた。その家をとび出して、知り合つた車庫の工務員の家に間借りをした。そう。十八のときだ。忽ち、以前の方面委員に呼びつけられ、恩知らずをのしられた。それは腹が苦しそうにふくれている、太つた、顔の丸い四十過ぎの男だつた。自由が欲しいんです、と安太は云つた。自由？と不審げな顔をしたその方面委員は暫沢な肘掛椅子のなかで何を生意氣いふかという風に急に笑い出した。そして笑いに咽喉をつまらせながら、それはデパートで売つてゐるのかい？と云つた。安太はだまっていた。すると彼は怒つたように云つた。金をいくらでも出してやるから、それを今から行つて買つて来て見せろ。それからでないと、今迄世話になつてゐる家から出ることは許さない。

そうだ。安太はその方面委員の家を出ると、その足でデパートへ行き、長い間休憩室に腰を下ろしてゐた。そしてただ人々の動きをぼんやり眺めてゐた。それから安太は、再び運転課長の家へ戻つて行つたのだつた。そして寝ても起きても会社支給の制服一着という姿で、車掌となり、工務員となつた。車掌から工務員となつたのは、職場でさえ運転課長の支配下にいることが耐えられなかつたからだ。その安太は裏のアナキストから本を借りて来て、暇さえあれば読みふけた。自由！自由！それを求めて安太は叫んでいた。その安太のなかには、常にあのピアノの音が流れてゐた。そしていつの間にかそのピアノの音とともに一つの幻想がうかんできてゐるのだつた。それは死や生活の重さのない自由の国の人々の顔であつた。それは貧しい服装ながらも幸福にかがやき、にこやかに自分へ声をかけるのだつた。

「今日は。いいお天気ですね。」すると自分も同じ言葉を微笑しながら答えずには居られないのだ。「今日は。ほんとにいいお天気ですね。」

ただ、それだけの幻想。全くただそれだけの幻想。しかし彼等の声は、うたうようなひびきをもつてゐた。それはあの、明るいピアノの旋律と何とよく諧和したのである。そして安太はその幻想の実現の手段を求めて、むさぼるように本を読んだ。無政府主義から共產主義を知つた。しかしそれらの思想に共鳴を感じるようになってから、妙なことに夜になると、死の恐怖

に襲われ、寢床の上にとび上るのだつた。安太は、何故自分がある思想をもちはじめたか否や、死の恐怖に襲われるようになったのか自分に理解出来なかつた。きつと身体が弱つていたのである。その彼に、人間が死から自由になるところにはじめて、それらの革命が有力な意味をもちはじめたのではないかと疑惑にとざされ勝たつた。そうなのだ。人間が死から自由になつたとき、革命が、真実のそして唯一の革命となるだろうという気がしたのである。生活を重くするだけに過ぎない現在の一切の社会制度は今すぐにどうしても破壊されなければならぬ。しかし人間の物的なもののからの解放が、同時に死からの解放でないかぎりには、その革命は、徒らな悲劇となるに違いないという気がしたのである。だが、死からいかにして人間は自由になり得るのだろうか。若しそれが不可能だとすれば、社会革命は、人間にとつて遂に無意味なものとなるのではなからうか。

そのころだ。あの安太の胸に痛切なピアノのひびきがふとやんでしまつたのは。安太はたまらなくなつて、裏のアナキストに訴えた。するとあの坊主刈のアナキストは、安太の耐えられない苦しみを笑つた。われわれのユートピアが実現したとき、死なんかどうでもよくなるのだ。そのときわれわれの意識がすっかり変つてしまふのだからと云うのだつた。だがユートピアが実現してもやはり人間は死ぬんでしよう

と安太は云つた。すると彼は再び笑つたのだつた。その日から安太は、彼から本を借りることをやめてしまつた。そしてある公休日の日、再びデパートへ行つて休憩室に坐つていた。その休憩室の前のラジオ部からは、たえまなく軍歌が流れ、出征して行く若い人々の姿も見えた。あるとき、何故彼は再びデパートへ行つたのか判らない。そして眼の前に流れる、どこことなく落着きをつた人々をぼんやり眺めながら、何を考へていたのだらう。そうなのだ。ただ、あのピアノの音と幻想をとり戻したかつたのだ。しかしそれは無駄であつた。たそがれ近くなつてデパートを出た。その入口の近くに、幼い子供を連れ、赤ん坊を負つた貧しそうな女が千人針をもつてたたずんでいた。晩秋の風が強かつた。赤ん坊は泣き叫び、幼い男の子は、乞食のような恰好で舗道の上にしゃがみ込んでいた。その男の子の死んだような顔には、寒そうな水ばなが垂れていた。安太はそれをしばらく眺めていた。それから電車に乗つて、陸軍省へ入つて行つたのだつた。

今度の戦争はじまる二月前のことだ。二十の志願兵として麻布に入隊した。永い満州の駐屯生活。北支への移動。その間安太は絶えず死を考へていた。精勤だつたためか、いつの間にか土官になつていた。しかし何か一切が無意味だつた。その一切は無意味だといふ感じは、何をしていても彼からついて離れなかつた。しかもその彼は、少年のときの彼とは違つて、自殺出来ないのだつた。ただ絶えず死と見つめ合つていただけだつた。それなのに何故決死隊へ志願したのだろうか。中隊から三名の決死隊員が募られた。漢口作戦のときだ。そのとき安太は、自分でも理解出来ないことだつたが、すすんで決死隊を志願したのである。だが足を負傷しただけで上海へ後送された。肺患が併発した。内地へ送還。東京での長い病院生活。その病院に銀次郎がいたのだつた。そう。敗戦の年の三月だつた。学校を卒業したばかりの若い軍医の銀次郎は、放蕩の限りを尽くしていた。毎日、いろんな女が、銀次郎へ面会にやつて来るので病院でも評判だつた。しかし彼の乱行は、彼の美貌の故にかえつて上官から黙認されているような形だつた。その銀次郎と知り合つたのは、些細のことからだつた。やつと歩けるようになつた安太が、自分の故郷である本所の焼跡を見つたため、外出の許可を貰いに医務官室へ入つて行つたときだつた。その部屋には銀次郎がただひとりいて、退屈したように、自分の硯箱の上にナイフで名前を刻んでいた。彼は安太から用向きを聞くと、冷淡な嘲るような声で云つた。

「お前は死ぬつもりかね。……左肺に大きな空洞があるんだぞ。」その瞬間、安太と彼との眼が合つたのだ。その一瞬に、銀次郎が自分と同じ哀れな存在であることを理解したのである。だが、銀次郎は何思つたか、再び嘲けるようなしかしどこか復讐するような特徴的な笑い声を立てながら、にべもなく「駄目だ。」と云うとそのまゝふと立ち上つて部屋を出て行つたのだ。

その後、回診のときになど銀次郎は、意味ありげな笑いをうかべながら「どうだね。」というのだつた。その「どうだね。」という言葉には、あるいはな耐えがたいひびきがあつた。そのたびに安太は「変りありません。」と答えた。すると彼は歪んだ笑いを見せながらいうのだ。「当り前さ。お前が変るときは棺桶へ入るときさ。」しかし、それでいながら、安太と彼との間には、ある暗黙の了解のようなものがあつた。そして終戦の日、いろんなデマがとび乱れて、病院のなかも騒然としているとき、思いがけなく彼がひつそりやつて来て、窓のところへぼんやりしている安太の肩をたたくのだった。振り向くと彼は何か真剣な眼をしながら、しかしやはりあのいやなひびきのある調子で、「どうだね。」と云つたのだつた。安太は、その彼へ思わず笑いかけながら、いつもと同じように「変りありません。」と答えた。そのとき銀次郎はどんなに氣狂いじみた笑い声を立てたであらう。そして思いがけなく安太の手をぎゅつと握りしめたのである。それは夏だというのに冷たい女のような手だつた。しかも不思議なことには、その彼は、眼に涙をうかべながら、ある親しみのあふれた夢中な声で云つてゐるのだつた。「敗けたら死ぬると思つたが、死ぬそうもないね。一体どんなことが起つたら、自分らは死ぬるのだろうか。」

その後間もなく、銀次郎は病院を去つたのだが、しかし安太は、その後まだ一年余りも病院

に残つてゐた。風のたよりに、銀次郎は就職もせずに焼跡のバラックに住んでゐるということを知つてゐた。彼の家の罹災したのだ。無理に退院してから、はじめてその銀次郎をバラックを訪れた。半年ほど前だ。二度目は彼の母の葬儀があつた翌日だつた。その時一日中銀次郎の家に居た。そして三月後には、砂川安太という人間は、この世の中にいなくなつてゐる。

安太の背に再びあの戦慄が過ぎる。どうしてこの戦慄が歓喜のそれでもあるのか、彼にはやはり理解しがたい。そして彼はふいに放心しながらその戦慄にもかかわらず、心の奥底に遠く鳴りひびくピアノの音を感じてゐる。しかし、そのピアノの音は、あの古典的なゆるやかな調子のものではなく、ひどく急調子のもとなつてゐる。それは、彼を震撼し、何ものかへはげしく駆り立てるのだ。彼は不安そうに落着かなく立ち上る。一体自分は、何を仕出かそうとしてゐるのだろうか！何をしよう、一切が不可能となつたこのときにだ。彼はあたりを見渡した。やはりひつそりして、星明りに焼跡が、黒々とひろがつてゐる。そうだ。自分には何事かが起つてゐるのだ。その時突然ある一条の光が彼の胸にひらめいた。彼は、しばらく放心したように竹ん（たけ）でいた。その彼は、思わず微笑してゐる。そしてそこから下り坂になつてゐる道を、勢よく降りて行つた。……

坂の途中で、突然恐怖にみちた女の低い短い

叫び声がした。安太は思わず立ち止つて、ぼんやり我に返つた。その叫び声は、その坂にそつて立つてゐる半ばこわれた石崖のかげの闇の中から聞えて来たように思われた。彼はその闇のなかを見つめた。すると思いがけなくそこに事務員風の女が立ちすくんでゐるのである。やつとその女の顔が見えて来る。ほの白く闇に浮んでゐる顔に眼のあたりが深々と深い黒いかげになつてゐる。そうだ。女は、もう夜も遅いこの淋しい道でふいにしくわした自分を怪しい者だと思つてゐるのかも知れない。それにこの復員服姿は、社会のつくり上げている恐怖の幻影にびつたりするではないか。安太は凍えたように立ちつくしてゐる女を避けるようにして歩み出している。すると思いがけなく女は、再び唖（おろ）れした強い叫びをあげると、その場にしゃがみ込んでしまつたのである。見ると、顔に手さえびつたり当ててゐる。そのときもう彼は何が彼女を驚かせたのかを理解してゐる。義足のみじめなほど情けない音が、かえつてこの静かな夜には不気味に聞えるのだ。彼は当惑したようにしばらく動けなくなつてゐる。勿論自分はこの音には馴れてしまつてゐる。しかし世間も、すっかり自分のような者の足音には馴れてしまつてゐると考えてゐたのは、誤りであつたのだ。

しかしやがて安太は、自分の足音に耐えながら歩き出した。そしてその女の傍をすり抜けるとき、ふと彼女の驚きを慰めたい氣がして、そのしやがみ込んでゐる女をちらりと眺めた。し

かしたただそれだけである。彼は声もかけないでだまつたまま通りすぎた。だが二三歩も歩み出さないうちに、ふとその女が銀次郎の妹の登美子であるような気がしたのである。彼は振り向いた。近くに銀次郎の家の灯が見え、その女はもう立ち上つてその方への道を駈け出そうとしている。

「登美子さん……じゃないですか。」

安太は、思わず咄嗟の声を出している。女はますます度を失つたような様子で、立ち止まとうろうろ振り返つた。彼はその女へ更に声をかけた。

「まだ一度しかお目にかかりませんけど、……病院で、兄さんのお世話になつた砂川ですが。」

女の態度は、ふいに崩れた。それから余り驚いた自分が滑稽に感じられたのか、しかしまだ恐怖の余韻の感じられるうつろな声で笑いはじめている。それはとめどなくいつまでも続いている。彼は微笑しながら彼女を見ていた。

「やはり登美子さんでしたね。」

その安太へやつと登美子は笑いをとめて答える。

「ぼんやり考え事をしていたので、びつくりしましたわ。」

「そう。よく判りますよ。……今、会社からのお帰りでですか。」

登美子は急に安太を見つめながら、無表情になつて首を振つた。

「ああ、用足しのお帰りですね。」

すると登美子は、再びだまつたまま同じようにゆつくり首を振る。

「でも、これから家へお帰りになる途中なんでしょう。」

だが、登美子は、ただだまつて首を振るばかりなのだった。彼は仕方なさそうに微笑しながら、登美子の方へ駈け出そうとしていた銀次郎の家の灯を眺めた。すると登美子も彼と同じように、自分の家の灯を眺めている。彼は、その彼女をしばらく見ている。しかし彼女は、その彼に気づかないで、ただ自分の家の灯を眺めつづけているのである。ふと安太に何かが判つた気がした。

「そのへんで、お茶でもお飲みになりませんか。」

すると登美子は我に返つた、救われたような声でいう。

「わたし、おいしいコーヒーのあるところ知っていますから、御馳走いたしますわ。」

その喫茶店は、マーケットの奥にある小さな店だった。小綺麗なテーブルが、三つ四つならべてあり、その一つを豪華な合オーバーを着た五十年輩の男が占領してコーヒーを飲んでゐる。その豪華な服装には、そのテーブルも椅子も狭い苦しいものに見える。安太は登美子について席へつきながら、その男のコーヒーを見た。それはミルクの入つた、濃い、いかにもうまそうなコーヒーなのである。安太は咄嗟に、こ

は高いなと感じる。それもきつと恐ろしいほど高いであろう。

ふと安太には、こんなところへ屢々来るらしい登美子が自分と何のかかわりもない女のように感じられている。彼と向き合っているのは見知らぬ一人の女だ。そしてただ偶然ここにいるように向き合っているだけなのだ。彼女は何か暗鬱そうにぼんやりしている。その彼女は黒つぱい地に赤い波形の縦縞のあるツーピースを着ている。どこかくずれた感じのする顔。きつと受け唇が、自分に妙に色情的に感じられるためだ。長い睫毛の顔が重そうに垂れて下を眺めている。やはり彼女は昔と同じように自分とは縁のない階級に住んでいる女なのだ。彼は所在なく、カウンターのかげでコーヒーを入れているマダムを見ている。どこか水商売上りのような、しかしそれでいてどこか聡明そうな年輩の女だ。四十ぐらいだろうか。四十五だろうか。いや、或いは五十になるのかも知れない。そうだ。あの豪華な合オーバーの男は、このマダムに思召があるのだろうか。

やつと、そのマダムが、コーヒーをもつて来る。思いがけず背が高いだけでなく、その物腰に素人らしいぎこちなさがあふれている。水商売上りではないのかも知れない。すると突然、登美子が耐えがたい声でいつている。

「不思議な感じがしますわ。」

その声に安太は登美子を見た。ふいに眼が大きい。その大きな眼で彼をいかにも不思議そう

に見ている。そうなのだ。彼女もどうしてここにこうしているのか判らないのだ。彼は思わず微笑する。だが、彼女は、急に眩しい眼になつて呟いた。

「ほんとにわたし不思議な気がしますの。いつも。」

そして登美子は我に返つたように嬉しそうに、声もなく笑う。しかしその彼女の笑いは、彼女の心のどこかに触れたと見えて、ふいに痛そうな顔になつた。次の瞬間、その眼は暗くなり、テーブルの端へ眼を落している。彼女はしばらくだまつている。だがやがて、乱れたような動作で顔を起すと、小さなしかし強い声で、しかしどこか弁解じみている調子でいう。

「わたし偶然を信じますの。」

「偶然？」

「わたしそれより仕方ありませんの。」

「そう、偶然はいつも神様の思召ですからね。」「いえ、わたし、兄みたくに神様なんかあると思つていませんわ。だから、わたし偶然を信じますの。偶然でいいのですわ。それが信じられなければ、わたし死んでいたかも知れませんわ。」

安太はしばらくその彼女を見つめている。それからやつという。

「僕には、偶然というものはよく判りませんが、しかし竹内さんが神様を信じているなんて……本当なのかなあ。」

「ええ、兄さんはそうです。そして一日中キ

リストのことばかりを云つていますわ。……わたし、兄は、大きらい！」

「兄さん？……どうして？」

だが、彼女は急にかたくなそうになつて答えない。彼はふいに退屈を感じる。そしてぼんやり彼は考えている。登美子が銀次郎をきらうことはあり得るかも知れぬ。銀次郎はちゃんと医師の資格をもちながら、復員して二年以上になるのにまだ働こうともしないからだ。登美子一人の働きでは過去の資産家も或いは窮迫しているのかも知れない。ブラックを建てたときの費用。三カ月ほど前の母親の死。そうだ。自分が銀次郎を訪ねたのは、あの葬儀以来だつた。だが恐らく、事実上、彼を訪ねるのはこれが最後であろう。

「変なことをお訊ねするようですが、今、どうして生活していらつしやるんです？」

安太は思ひ出したように訊ねる。

「仕様がありませんの。」

「仕様がないつて……どうなんです。」

「ええ、ただ仕様がありませんの。」

「でしようが、その仕様がないつていうことが判らないんですよ。」

すると登美子は、暗い絶望的な調子になつて、投げ出すようにいう。

「でもそれで、構いませんの。」

だがすぐに登美子は努力した微笑をうかべている。仕様がないつと彼は考える。全く仕様のな話だ。そして仕様がないつということのな

かに、現代の虚無の現われていることを彼は感ずる。その彼は、ふと、一つの幻想に陥つてゐる。遠く潤葉樹らしい茂つた木の葉が、眩しい光にかがやいてゐる。その木の下で少女が縄とびをしているのだ。少女らはみな裸足でリズムカルに次から次へとゆるやかにとんでは元の場所へ戻つて来る。余り遠いので笑いさざめいてゐるらしい声は聞えないが、彼女らのにこにこ樂しそうに笑つてゐる顔が鮮やかに見える。そして彼女らは、廻る縄をゆるやかに次から次へととんでは、元の場所に戻つて来る。それはいつまでも続いて、そして飽きる風もない。——ふと安太は我に返つた。身体が熱つぽい。三十九度近くはあるだろう。咳が出る。

「風邪ですの？」

と登美子が声をかけた。彼は、何故かその登美子が眩しく感じられる。

「ええ、ちよつと。」と彼は深い溜息をしながら祈るようにいう。「とにかく幸福になつて下さい。」

彼女は、機械的に小さな声で礼を云いながら、その彼を見ている。その眼の色は次第に不審な色を帯びて来る。それから努力した微笑をうかべながら、おずおず非難する。

「だつて、いつか……」

「そうです。そうです。」と彼は微笑しながら力をこめて云う。「いつかお訪ねしたときのことでしょう。兄さんと一緒になつて、あなたを怒らせたときのことでしょう。今もあの考えに